

東洋ビューティ

インベーションセンター中央研究所

久間 將義 所長

化粧品OEM・ODM大手の東洋ビューティ(本社大阪府、増井勝信社長、06-6241-2121)は、研究開発部門の拡充に注力している。「お客さまに寄り添い、ともに成長していける企業」を志向しているのだという。同社の研究開発部門の中核を構成するインベーションセンター中央研究所の久間(ひさま)将義所長に話を聞いた。



美白美肌化粧品について

「お客さまと一緒に製品を育てていく」

久間「美白」は文字通りだが、「美肌」となるべく、お客さまによって考え何を求めるのかはさまさまだ。お客さまの要望をしっかりと理解し、化粧品として製品化するための技術の開発を進めている。お客さまの先には消費者がいるということも理解したうえで、その化粧品に適した技術を提供してきている。化粧品製品の製剤技術は日々進歩している。その中で当社でも独自技術を持って

術を持って取り組みを進めている。研究開発部門の構成について

基礎研究室のような部署に多数の人数を配置している化粧品OEM会社は、そう多くはないのではなかと感じている。そういったところが、製品の高付加価値化までを一貫して提案できるという、当社の強みにつながっていると感じている。

基礎研究室を立ち上げたのはいつか。久間 基礎研究室の元となる、製品・成分などの有用性評価や新規技術の開発を本格的に始めたのは15年ほど前だ。以前は、有効性・安全性評価などは外部機関に外注していたり、お客さまに行ってもらったりしていた。当社としてはものを作ってご提案するだけだった。そこから「お客さまに

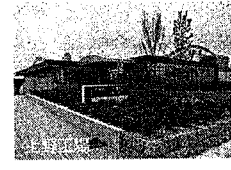
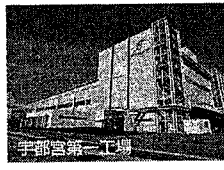
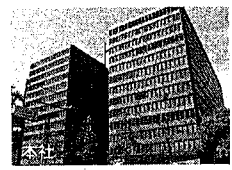
により大きな力を注ぐ」ことができるようになった。また、肌測定の結果に基づき商品開発など、消費者から求められる取り組みを行うことは、販売会社の企業価値の向上にもつながる。

機能性・安全性評価はすべて自社内で行っているのか。久間 もちろん必要に応じて外注も使っている。ただ、自社内に基礎研究室を持つことで、製品評価について「分かっている」ことが、外注を使うよりも、とても有効に働いている。昨年には、臨床試験会社のセブンオーワンリサーチ(本社東京都、増井勝信社長)を子会社化し、ヒト臨床試験の部分を中心に強化した。製品評価という性質上、子会社

近いところで寄り添いお客さまと一緒に製品を育てていく」お客さまと一緒に成長していくというスタンスで、研究開発体制の拡充を進めてきた。基礎研究室では、お客さまの要望を具現化するべく、産官学の連携の中で、技術力の強化に先進的に取り組んできた。その象徴的な存在が当社独自の「アミンC誘導体」Fucos(フアンコス)コースだ。同素材の開発・研究には、立ち上

品に注ぎ込み、その会社の「留め型」の技術として使っていたというケースもある。「東洋ビューティと共同だから開発できた製品」と喜んでいただいていることも少なくない。当社では學術とのネットワークも構築しており、研究内容を論文化したり学会発表したりして、データの信頼度を高めることもできる。研究開発を当社にお任せいただけるよう、販売は得意とする企画・販売

企画開発から製品まで、お客様の化粧品づくりをトータルにサポート
信頼と実績のある化粧品・医薬部外品の受託専門メーカー



工場 上野(三重) / 宇都宮 東西二拠点の研究開発及び生産体制 研究所 大阪 / 宇都宮

東洋ビューティ株式会社 <http://www.toyobeauty.co.jp/>

本社 〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町4丁目1番3号 大阪御堂筋ビル4F
Tel. 06-6241-2121 Fax. 06-6241-2125

東京支店 〒103-0027 東京都中央区日本橋2丁目16番11号 日本橋セントラルスクエア6F
Tel. 03-3548-2991 Fax. 03-3548-2996